様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２４１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０４０９

研究課題名（和文）地方都市の「余暇空間」の若者にみる場所感覚

研究課題名（英文）Youthful senses of place and leisure spaces in local city

研究代表者
山口　晋（YAMAGUCHI, Susumu）

目白大学・社会学部・講師

研究者番号：５０５０７７１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，①地方都市の若者文化，とりわけ音楽文化と地域社会との関係，②大都市周辺地域における若者の転出入行動を場所感覚の観点から探求した。①については，フリーの野外音楽フェスティバルでは，日本最大規模の「上田ジョイント」の盛衰について，「上田ジョイント」の制度化と，オーガナイザーの「サブカルチャーからの卒業」をキー概念に分析した。②については，埼玉県戸田市における，転出入者の行動を調査票調査から明らかにした。その際には，転出入行動が顕著であったのが若年層であり，転出入先が戸田市に隣接する市に多いことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this research, it grasps about (1) the opportunities and challenges found in the music culture of local cities in Japan and (2) the behavior of the migration in the surrounding area of the Tokyo metropolitan area.
First, I will discuss the largest free outdoor music festival and the local communities of Japan This study examines the rise and fall of the UEDA JOINT Festival. In this study, the key concepts are the institutionalization of the Festival and the organizers' loss of interest in the music activities. Second, I will explore the behavior of the migration in Toda-city, Saitama, and its factor. The methodology of a survey is a questionnaire. About 50% of out-migrants was the youth, and it was 25-39 years old. They choose Saitama Prefecture as out-migrant places, and about 70% of it moves out to Saitama city, Kawaguchi city. About in-migrants, about 60% of it is in-migrant from Saitama Prefecture and Tokyo. About 50% of in-migrants was the youth, and it was 25-39 years old.

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：若者　場所　地方都市　音楽　消費　上田市　戸田市

## １．研究開始当初の背景

本研究の背景と動機は，(1) 主体（主に若者）の場所感覚や場所への愛着に関する理論的・経験的考察および，(2) 地方都市の若者文化と余暇空間の探求，であった。

（1）については，場所概念を体系化したジョンストン（2002）を援用しつつ，場所に対する意識や感覚について理論的かつ経験的に考察していくことと，場所イメージや地域性，ロカリティについて事例研究を進めていくことが大きな研究方針であった。(2) については，「地方分権」や「地方の時代」と言われながらも，地方都市から大都市への若者の流出に歯止めがかからない。その一方で，地方都市を生きる若者に迫る地理学的研究は非常に少ない。若者が地方都市に対してどのような意識をもち，意味づけをしているかについては明らかにされていない。そのような問題意識から，若者がたむろする地方都市のストリート，公園，広場を「余暇空間」として設定し，聞き取りを重ねることで，地方都市の若者の生きにくさ／生きやすさ，東京など大都市への憧れ／劣等感などといった地方都市を生きる若者の意識や意味づけの様相を明らかにしようとした。

## ２．研究の目的

本研究の目的は大きく分けて 2 つあり，(1) 地方都市の若者文化，とりわけ音楽文化と地域コミュニティとの関係，(2)大都市周辺地域における若年層の転出入行動を場所感覚の観点から探求したもの，になる。

(1)地方都市の若者文化と地域コミュニティ

近年，大都市のみならず地方都市や農山漁村において，野外音楽フェスティバル（以下，野外フェス）が開催されている。その多くは有料であるものの，入場料が無料の野外フェスも散見される。入場料が無料であると収入が得られないので，主催者は野外フェスが開催される地域の様々な資源を活用する必要がある。その際に，野外フェスが地域社会や地域コミュニティにおいて，どのような文脈や意図で開催されているのだろうか。野外フェスを取り巻くアクター（主催者，行政，協賛企業など）は，野外フェスをどのように捉えているのであろうか。それについて特定の野外フェスの経験的調査からそれらについて明らかにしていくことが本研究の目的となる。

(2)大都市周辺地域における若年層の転出入行動と場所感覚　人文地理学において，大都市周辺地域の居住地移動に関する研究は一定の研究蓄積がある。一方，ある特定の都市や地域をめぐる住民の転出と転入両方の動態については，これまであまり取り上げられてこなかった。こういった研究が少ない理由として，方法論的レベルでは，郵送法などの調査票調査を実施する際，当該地域からの転出者の動きを捕捉しにくく，有効なサンプル数が得られないことがあげられよう。本研究では，埼玉県戸田市にある戸田市政策研究所の協力により，住民基本台帳データを使用し，戸田市からの転出者と戸田市への転入者のいずれにも郵送法で調査票調査を実施することができた。どのような年齢階層や世帯構成の集団がどこに転出したのか，あるいはどこから転入してきたのか。その集団は戸田市にどれくらいの期間住んでいたのか，その住宅の所有関係は転出前後で変化があったのか，といったことに着目しながら，転出入行動の動態的な特徴とその要因の一端を明らかにすることを目指す。

## ３．研究の方法

(1)地方都市の若者文化と地域コミュニティ

余暇空間のひとつとして取り上げたのが，長野県上田市で開催される「上田ジョイント」という野外フェスである。これは上述のように無料の野外フェスであり，主催者への詳細な聞き取りと野外フェスの観察調査を実施した。

(2)大都市周辺地域における若年層の転出入行動と場所感覚　上述のように A3 版両面 1 枚の調査票による調査であり，平成 21 年度に戸田市から転出した 18 歳以上の市民 8,960 名および，同年度に戸田市に転入した 18 歳以上の市民 10,494 名からそれぞれ 900 名，計 1,800 名を無作為抽出し，調査票を郵送した。転出者 352 名，転入者 412 票から有効回答が得られた。調査票の回収率は転出者が 39.1%，転入者が 45.8%であった。

## ４．研究成果

地方都市の余暇空間としての上田ジョイントが，地域社会や地域コミュニティとのかかわりの中で，どのような盛衰を経たのかを以下で示したい。その際のキー概念となるのが「制度化」と「サブカルチャーからの卒業」である。

(1)「事業化」する上田ジョイントのジレンマ

主催者である T 氏はアメリカの音楽大学を卒業し，その好きな音楽のイベントを故郷・上田で開催した。しかしながら，前年よりも多様なアーティストを招聘し，ましてや，開催場所の規模も大きくなると何らかの財源を確保する必要が出てくる。その時に，上田ジャズフェスティバル実行副委員長だったのが，K 氏であり，彼女は町内会や婦人会などのネットワークを駆使して協賛する団体を増やしていった。E 社からの特別協賛も彼女の人的ネットワークによるものである。上田ジョイントを発展させるためには，安定した財源を確保する必要があった。そのために企業からの協賛金や行政の補助金も必要になるし，社会的信用を得るために NPO 化も必要となる。しかしながら，制度化すればするほど，協賛団体や行政からの「まなざし」が強くなり，NPO としての社会的責務を果た

す必要が出てくる。そのような中で，T 氏自らの音楽実践をも自主規制せざるを得なかった。2009（平成 21）年の NPO 化の時も，T 氏はその理事長の役職を断っている。このような一連の流れが，野外フェスとしての上田ジョイントの終焉につながったと考えられる（図 1）。

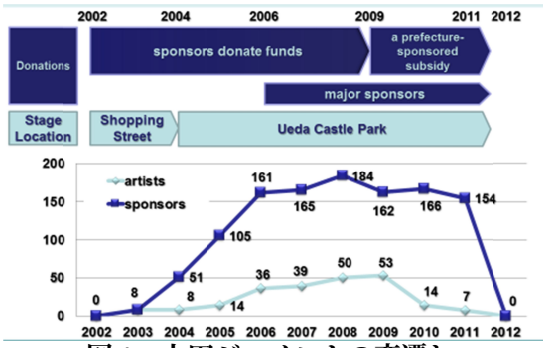


図 1　上田ジョイントの変遷と
出演アーティストと協賛企業の変化

(2)主催者の野外フェスからの「卒業」　かつて，佐藤（1995）は，暴走族が暴走行為から足を洗って，「卒業」し，「落ち着く」際には，加齢や結婚，出産といったライフイベントが大きく作用していると述べた。T 氏も 2009（平成 21）年に結婚し，子供ももうけている。制度化をめぐる考えのズレよりもさらに大きな理由として，T 氏が「野外フェス」という音楽文化から「卒業」したのではないか。2010（平成 22）年以降の 2 回の上田ジョイントは出演アーティストを一新したという。そのアーティストとは，これまで T 氏と一緒に全国のライブハウスをツアーしていたメンバーだが，結婚と離婚を繰り返したり，ドラックを使用していたり，社会的に逸脱していた。そのようなメンバーへの嫌悪感が一因であると考えられる。また，T 氏は H 氏と同居し音楽教室を開業して収入を得ており，親の世代の価値観，「両親の文化」が，社会的な逸脱への嫌悪感に少なからず影響を与えていると考えられる（上野・毛利 2002）

(3)大都市周辺地域における若年層の転出入行動　まず，戸田市からの転出者の約 6 割は，その居住期間が 5 年未満と短く，年齢構成も 25～39 歳までが半数以上ということが分かった。さらに，「転勤」で「大阪府」や「愛知県」といった大都市圏を含む，日本各地の道府県に転出する一方で，その 6 割は「埼玉県」と「東京都」への転出である。とりわけ，「住宅事情」や「結婚」といった理由で，「川口市」，「蕨市」，さいたま市の「南区」，東京都の「北区」，「板橋区」への転出が顕著である（図 2）。次に，戸田市への転入者についても，年齢構成は 25～39 歳までが半数以上であり，転入前の前住所は「埼玉県」と「東京都」が圧倒的に多く，全体の 7 割弱を占める。戸田市への転入理由は「住宅事情」が最多で，その後に「結婚」が続き，前住所も戸田市に接する「川口市」，「蕨市」，さいたま市の「南区」，東京都の「北区」，「板橋区」からの転入が多く，とりわけ「川口市」からの転入が多いことが確認された。

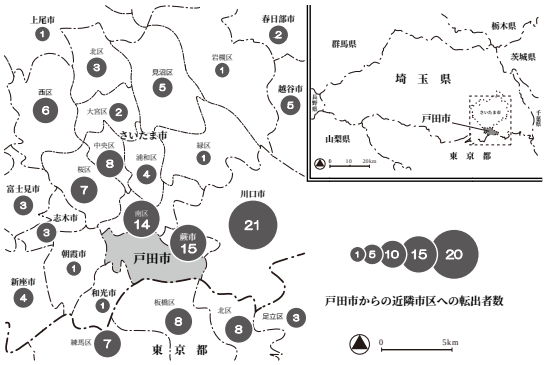


図 2　戸田市の近隣市区への
転出者数とその分布

こういった点から，戸田市からの転出先としての市区と戸田市へ転入する際の前住所としての市区が重なり，いずれも戸田市に近接することが明らかになった。ただし，住宅の所有関係からみると，転出入行動の内容は異なる。というのも，戸田市からの転出の場合は，「民間借家（アパート等）」から「持家（一戸建）」や「持家（分譲マンション）」への住み替えの動きがある一方で，転入の場合は，「民間借家（アパート等）」から「民間借家（アパート等）」と「持家（分譲マンション）」への住み替えの数が同程度であった。すなわち，転出行動は「借家」から「持家」への住み替えが明確である一方で，転入行動は，「持家」としての分譲マンションへの住み替えはあるものの，まだまだ「借家」に住まうことが認められる。

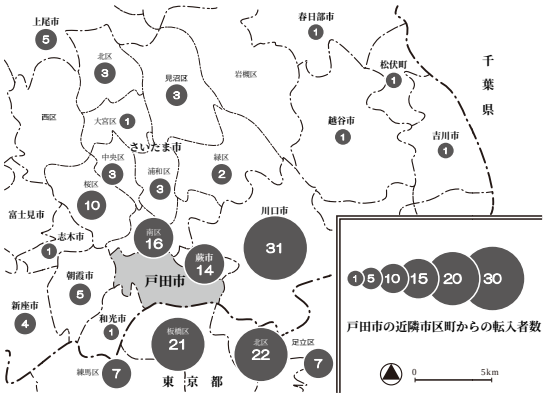


図 3　戸田市の近隣市区町からの
転入者数とその分布

戸田市の転出入行動の特徴としては，戸田市における分厚い「民間借家（アパート等）」のストックに比較的短い期間住まう若年層が，ライフイベントなどによって，近隣市区で持家を取得している。その一方で，戸田市からの転出者以上のボリュームの転入者が近隣市区から戸田市に移り住む。近隣市区に

も分厚い「民間借家（アパート等）」のストックがあり，戸田市に転入する際に，その多くは「民間借家（アパート等）」と「持家（分譲マンション）」のいずれかに住まうことになる。そして，その「民間借家（アパート等）」の住民がまた転出していく。このような一連の流れで，戸田市の人口の社会増加率は高いわけだが，住宅ストックが不足してくると，そういった人口の流動性は減少するかもしれない。あるいは，直近の問題で若年世帯が増加する中で，保育施設の不足が懸念されているという。戸田市のみならず，地域をめぐる政策課題に対して，より詳細な転出入行動の分析から検討していくことがますます求められよう。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 山口　晋，書評　増淵敏之著『路地裏が文化を生む!—細街路とその界隈の変容—』，ポピュラー音楽研究，査読無，17 号，2013，57-60

② 山口　晋，山本哲史，大都市周辺地域の転出入行動とその要因，目白大学人文学研究，査読有，9 号，2013，85-100

〔学会発表〕（計 8 件）

① Yamaguchi S. The largest free outdoor music festival and the local communities of Japan: A case study of the UEDA JOINT Festival，2014 ISIS-Key West International Multidisciplinary Academic Conference, Institute of Strategic and International Studies，March 2014，Key West, USA

② 山口　晋，ストリートの「文化実践」からみる都市研究の可能性，大阪市立大学文学部記念学術シンポジウム　市大文学部と「都市文化研究」再考（招待講演），2013 年 12 月，大阪市立大学

③ 山口　晋，信州上田における野外フェスの終焉と地域コミュニティ，日本地理学会（大衆文化の地理学研究グループでの発表），2013 年 9 月，福島大学

④ 山口　晋，都市と消費文化の地理，経済地理学会（ラウンドテーブル「脱成長時代の流通と消費の空間」での発表），2013 年 6 月，東京大学

⑤ Yamaguchi S. The practice of artists and control of the Tokyo Metropolitan Government in the Heaven Artist Program，5th International Academic Conference: Prosperity and Stability in the Present World, International Institute of Social and Economic Sciences, February 2013, Buenos Aires, Argentina

⑥ 山口　晋，ストリートの地理—研究動向の整理と今後の展望—，日本地理学会（都市社会地理研究グループでの発表），2012 年 10 月，神戸大学

⑦ 山口　晋，転出入者・若年世帯・場所への愛着—量的調査からみる戸田市のすがた—，戸田市政策研究所シンポジウム（招待講演），2012 年 3 月，戸田市政策研究所

⑧ 山口　晋，山本哲史，転出者の行動からみた埼玉県戸田市の特徴，人文地理学会，2011 年 11 月，立教大学

〔図書〕（計 7 件）

① 山口　晋編，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，木曽町開田高原の文化・産業・社会，2014，59

② 山口　晋編，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，都営地下鉄大江戸線周辺にみる「東京らしい」景観，2014，59

③ 山口　晋編，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，木曽町開田高原における生活と地域社会，2013，47

④ 山口　晋編，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，JR 山手線駅周辺にみる「東京らしい」景観，2013，45

⑤ 山口　晋，丸善出版，サブカルチャー・大衆文化，『人文地理学事典』，2013，320-321

⑥ 山口　晋，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，戸田市若年世帯意識調査成果報告書（戸田市政策研究所アンケート調査業務委託），2012，108

⑦ 山口　晋，目白大学社会学部地域社会学科山口研究室，戸田市人口移動実態調査成果報告書（戸田市政策研究所アンケート調査業務委託），2011，89

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

なし

○取得状況（計 0 件）

なし

〔その他〕

ホームページ等

http://yamagu01.seesaa.net/

## ６．研究組織

(1)研究代表者

山口　晋（YAMAGUCHI，Susumu）
目白大学・社会学部・講師
研究者番号：５０５０７７１２

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし